

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第27巻 第2号



仙人窟

殿ヶ池避難小屋（標高約2,000m）をあとに、観光新道（旧越前禅定道）を下るとやせ尾根の続く場所に出ます。「仙人窟（せんにないわや、せんにながいわや）」はこのやせ尾根の一角にあります。大きな岩が積み重なって、雨宿りができるくらいのスペースができています。呼び名から仙人が関係すると考えられますが詳しいことはわかっていません。

あたりは、「餓鬼ヶ咽（がきがのど）」と名づけられた奇岩があるなど、ごつごつした大小の岩がむきだしになっており、よく見ると岩と岩との間に隙間もできています。これらの岩は、地質的には、約10数万年前の白山火山の噴出物からなっています。奇妙な形はその噴火の際やその後の侵食によりつくりだされた自然の造形物であると思われます。

現在、登山道はこの仙人窟の別当谷側を通るようになっていますが、江戸時代、明治時代の白山登山の紀行文や、昭和初期に作られた白山の地図を見ると、反対の湯の谷側を通っていたようです。

（小川 弘司）

変容する言語島・白峰村の方言

加藤 和夫

加賀地方の言語の島

白山の麓、白峰村の方言は、加賀地方の方言の中でも周囲と異なる多くの特徴を持ち、従来から方言研究者の間では、加賀地方の言語の島 (= 言語島) と呼ばれ、注目されてきました。図1は川本栄一郎氏による石川県の方言区画図 (図の右はその区分) ですが、ここでも白峰村の方言は一つの方言区画として特立されています。

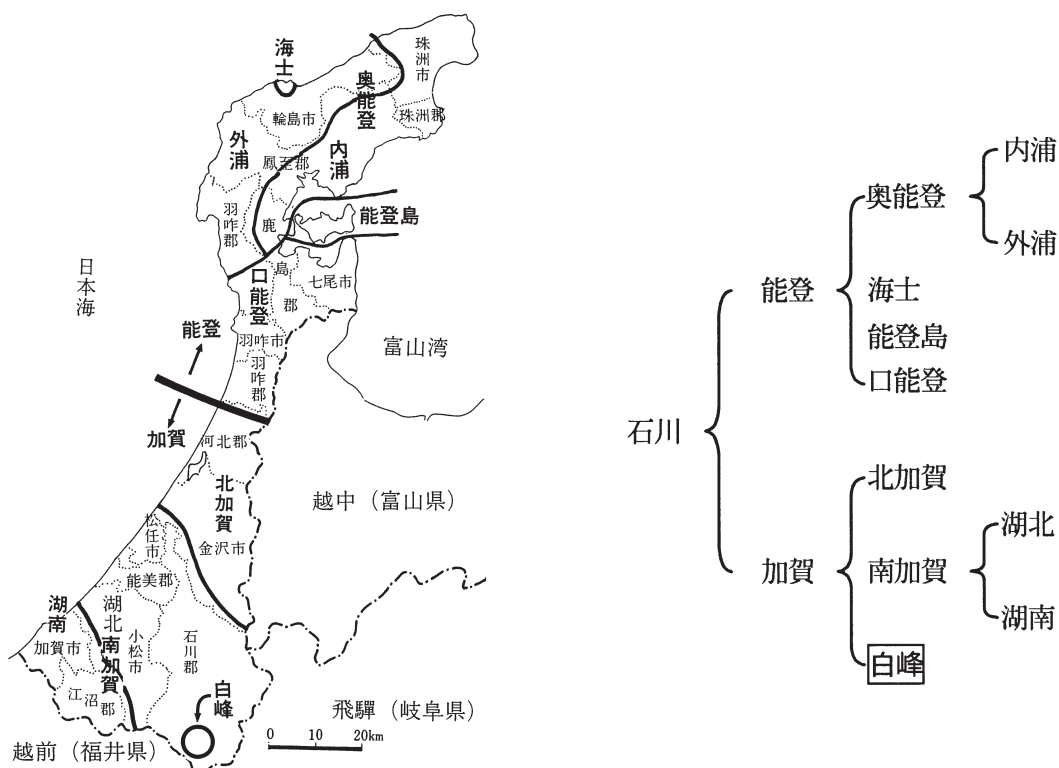


図1 石川県の方言区画図

現在の白峰村は、村役場のある字白峰と、少し離れた字桑島の二つの集落からなっていますが、周囲の加賀方言との違いは特に字白峰 (旧牛首) の方言に顕著です。したがって、本稿では以下、字白峰の方言を白峰方言と呼ぶことにします。

伝統的な白峰方言の特徴の中で特に注目されるのは、その古態性 (古い時代、特に中世以前の中央語の残存と考えられるもの) と独自性 (他の加賀地方の方言にはない白峰方言独特のもの) です。これらの特徴は、かつての白峰が交通不便な山間の地で他地域との交流が少なかったこと、江戸時代には天領、つまり幕府直轄の地であったため、加賀藩 (言語的に加賀藩域の方言) の影響を受けにくかったこと、などによるものと思われます。中でも古態性については、隣の富山県の、かつて秘境と呼ばれた五箇山地方の方言に通じる特徴がいくつか見られます。同じ北陸地方の山間奥地として、京都方面から伝播した古い時代の中央語がたまたま同じように残ったものと考えられます。

従来指摘されてきた、白峰方言の古態性を示す言語事象の代表的なものには次のようなものがあります。

- (1)「喜ぶ」「飲む」など、一部のバ行・マ行四段(五段)動詞の音便形が「喜んだ」「飲んだ」のような撥音便でなく、「喜うだ」「飲むだ」のようなウ音便となる。
- (2)味の表現で「塩味が濃い・塩辛い」ことをショーファイ、ショーワイなどと言う。
- (3)味の表現で「塩味が薄い」ことをアマイ、アーミヤなどと言う。
- (4)「地震」の意の古語「なる」に由来するナイやネー、「昨年」の意の古語「こそ」に由来するコッゾなどが使われている。
- (5)共通語の「つ」にあたる発音がトゥのように発音される。

また、白峰方言の独自性を示す言語事象の代表的なものには次のようなものがあります。

- (6)自分のことをさす自称代名詞にギラが使われる。
- (7)感謝の意の挨拶ことば「ありがとう」に当たるものとしてヨシタイ、ヨーシタイ(「よくしたね」の意)が使われる。
- (8)別れの挨拶ことば「さようなら」にあたるノイノ(「のう、のう ねえ行こう」の意)が使われる。
- (9)虫や動物名の末尾にメを付け、イリメ(犬)、ヘンメ(蛇)、アリメ(蟻)などのように言う。
- (10)形容詞がアーキャ(赤い)、サービ(寒い)のように発音される。
- (11)加賀方言で「書いトル」(書いている)、「読んドル」(読んでいる)となるところが、書いチョル、読んジョルのように「~チョル・~ジョル」となる。
- (12)文末詞「ね」にあたるものが「暑かったニャー」のように~ニャーとなる。

このほかにも、白峰方言の古態性、独自性を示す事象は少なくありませんが、これらの例だけでも、白峰方言が他の加賀方言とはかなり異なった特徴をもつ方言であることがわかるでしょう。

変わる白峰の方言

ところで、全国の諸方言が共通語化を中心に大きく変容しつつある現在、白峰方言もまた例外ではありません。特に古い日本語の残存とも言える事象は確実に衰退しています。例えば、30数年前に岩井隆盛氏によって使用が確認されている「地震」の意のナイ、ネーは、最近の調査では理解語(使わないが知っている語)としても全く確認できませんでした。この30年余りの間に白峰方言から完全に消え去ったようです。

以下では、先に紹介した白峰方言の古態性、独自性の中から、それぞれ2つの事象を取り上げ、現在の白峰方言の実態を見てみたいと思います。図表1~4は、金沢大学教育学部国語研究室が1993年夏に白峰村(字白峰、字桑島)で行った調査(筆者と学生17名が参加)のうち、字白峰の結果を示したものです。図表中、左の欄が話者の世代、右側の2つの欄の丸で囲んだ数字が男女別の話者の通し番号です。10歳代の中学生から90歳代まで計58名、世代による人数(男女別の人数も)の偏りはありますが、白峰方言が現在どのように変わりつつあるかがよくわかります。

図表1は先の(1)の事象に関するものです。文献国語史では中世まで中央語(京都語)で使われていたとされるバ行・マ行四段動詞のウ音便は、西日本方言では中国・四国地方の一部と九州・沖縄地方の広い範囲で確認されていますが、北陸地方では、石川の白峰と奥能登、富山の五箇山のみ確認されるものです。図表からはウ音便のヨロコダ、ヨロコダが意外に根強く50歳代以上で今も使用されていることがわかります。一方、共通語や他の加賀方言の影響を受け40歳代以下ではヨロコダに変化しています。

図表2は(2)の事象に関するものです。白峰方言で聞かれるショーファイ、ショーワイは、ポルトガル人宣教師たちによる中世末期の日本語(京都語)の記録である『日葡辞書』(1603年刊)に「シヨハユイ 塩辛いこと、塩味がすること」とあるシヨハユイに由来するものと考えられます。

福井県嶺北地方から石川県加賀地方、そして富山県西部地方で広く使われる北陸共通語とも言えるクドイが全世代に使われている中、ショーファイ、ショーワイもクドイとの併用という形で、やはり50歳代以上でまだ使用されていることがわかります。シオカライ、ショッパイといった共通語的表現はまだほとんど白峰には入り込んでいません。ショーファイ、ショーワイにしても、加賀方言の影響を受けて新しく使われ始めたクドイにしても、シオカライやショッパイにぴったり置きかえられない、どこか少し違う味、そんな気持ちがあるための結果だと思われます。

図表1 喜んだ

年齢	男	女	〈凡例〉 △ ヨロコーダ ▽ ヨロコダ ● ヨロコンダ
90歳	① △		
80	② ▽	① △	
	③ ▽	② ●	
		③ △	
70	④ △	④ ●	
	⑤ △	⑤ △	
	⑥ △ ●	⑥ △	
	⑦ ●	⑦ △	
	⑧ △	⑧ △	
	⑨ △	⑨ ▽	
60		⑩ △	
		⑪ ▽	
		⑫ △	
		⑬ △ ▽	
50	⑩ △	⑭ ●	
		⑮ ▽ ●	
		⑯ △ ●	
		⑰ △	
		⑱ ●	
40	⑪ ●	⑲ ●	
		⑳ ●	
30	⑫ ●	㉑ ●	
	⑬ ●	㉒ ●	
20	⑭ ●	㉓ ●	
		㉔ ●	
中学生	⑮ ●	㉕ ●	
	⑯ ●	㉖ ●	
	⑰ ●	㉗ ●	
	⑱ ●	㉘ ●	
	⑲ ●	㉙ ●	
	⑳ ●	㉚ ●	
	㉑ ●	㉛ ●	
	㉒ ●	㉜ ●	
	㉓ ●	㉝ ●	
		㉞ ●	
		㉟ ●	

図表2 塩辛い

年齢	男	女	〈凡例〉 △ショーファイ (ショファイ、ショー ファー、ショーハイ) ▽ショーワイ (ショーワイ、ショー ワ、ショワイ) ● クドイ (クドイ、クデー) * シオカライ・カライ † ショッパイ
90歳	① ▽		
80	② ●	① ●* †	
	③ ●	② ▽ ●	
		③ ●	
70	④ ●	④ △ ●	
	⑤ ●	⑤ ▽	
	⑥ △ ●	⑥ ●	
	⑦ △ ▽ ●	⑦ △	
	⑧ △	⑧ ●	
	⑨ ●	⑨ △	
60		⑩ △ ▽	
		⑪ ●	
		⑫ ▽ ●	
		⑬ ▽	
		⑭ ●	
50	⑩ △ ●	⑭ ▽ ●	
		⑮ ▽ ●	
		⑯ ●	
		⑰ ●	
		⑱ ▽ ●	
40	⑪ ●	⑲ ● *	
		⑳ ●	
30	⑫ ●	㉑ ▽ ●	
	⑬ ●		
20	⑭ ● *	㉓ ● †	
		㉔ †	
中学生	⑮ ●	㉕ ● †	
	⑯ ●	㉖ ●	
	⑰ ● †	㉗ ●	
	⑱ †	㉘ ●	
	⑲ ●	㉙ ●	
	⑳ ●	㉚ †	
	㉑ ●	㉛ †	
	㉒ ●	㉜ ●	
	㉓ ●	㉝ ●	
		㉞ ●	
		㉟ ●	

図表3は(6)の事象に関するものです。「私」のことをギラと言う何とも不思議な言い方は、全国的にもきわめて珍しいものです。語源もよくわかっていません。「ギラの里白峰」というキャッチフレーズが使われることがあるほど、白峰の人たち自身が白峰方言の象徴のように感じている言葉でもあります。そのせいか、ギラは男性を中心に今もよく使われており、中学生ではギラから発音が変化したギャーという形も聞かれます。ギラ、ギャーは今しばらくは男性を中心に白峰方言を象徴するものとして受け継がれていくと思われます。ただ、その音声的響きが女性に好まれないため、20歳代以下の女性ではギラは聞かれませんでした。

図表4は(11)の事象に関するものです。「～ている」にあたる～ Cholは中国・四国地方の西から九州地方にかけて広く分布しますが、北陸地方では白峰と富山の五箇山だけに聞かれるものです。白峰では、20歳代以下でこそ加賀方言化した～トルが使われているものの、30歳代以上では男女ともに今も～Cholをよく使っていることがわかります。今しばらくは白峰方言の特徴の一つとして使われ続けることでしょう。

図表3 私 自称代名詞

年齢	男	女	〈凡例〉 △ ギラ ▽ ギャー、ギャ ◆ ウラ ● ワタシ * ワシ + オレ † ボク
90歳	① △		
80	② △	① △	
	③ △	② △ ●	
		③ △	
70	④ △	④ △	
	⑤ △ *	⑤ △	
	⑥ △	⑥ △	
	⑦ △ *	⑦ △	
	⑧ △	⑧ △	
	⑨ △ *	⑨ △	
60		⑩ △	
		⑪ △	
		⑫ △ ●	
		⑬ △	
50	⑩ △	⑭ △ ●	
		⑮ △ ●	
		⑯ ●	
		⑰ △	
		⑱ △	
40	⑪ △	⑲ △	
		⑳ ●	
30	⑫ ◆	㉑ △	
	⑬ △		
20	⑭ △	㉒ ●	
		㉓ ●	
中学生	⑮ △	㉔ ●	
	⑯ △ +	㉕ ●	
	⑰ △ ▽	㉖ ●	
	⑱ ▽	㉗ ●	
	⑲ ▽+†	㉘ ●	
	⑳ △	㉙ ●	
	㉑ △ †	㉚ ●	
	㉒ ▽	㉛ †	
	㉓ * †	㉜ ●	
		㉝ ●	
		㉞ ●	
		㉟ ●	
		㊱ ●	

図表4 (花が) 散っている

年齢	男	女	〈凡例〉 △ チッチョル ● チットル † チッテイル、チッテ ル * その他 N 無回答・誤答
90歳	① N		
80	② N	① N	
	③ ●	② △	
		③ △	
70	④ △	④ △	
	⑤ △	⑤ △	
	⑥ △	⑥ △	
	⑦ △	⑦ △	
	⑧ △	⑧ N	
	⑨ △	⑨ N	
60		⑩ △	
		⑪ △	
		⑫ △	
		⑬ △	
50	⑩ △	⑭ N	
		⑮ N	
		⑯ △	
		⑰ △	
		⑱ △	
40	⑪ †	⑲ △	
		⑳ *	
30	⑫ △	㉑ △	
	⑬ △		
20	⑭ △ ●	㉒ ●	
		㉓ ●	
中学生	⑮ N	㉔ ●	
	⑯ ●	㉕ ●	
	⑰ ●	㉖ ●	
	⑱ *	㉗ ●	
	⑲ ●	㉘ ●	
	⑳ ●	㉙ ●	
	㉑ △ ●	㉚ N	
	㉒ †	㉛ ●	
	㉓ ●	㉜ *	
		㉝ †	
		㉞ *	
		㉟ ●	
		㊱ ●	

白峰方言の将来

以上、白峰方言の特徴的な事象のごく一部について、その変化の実態をご紹介しました。今回の調査結果全体を見渡した場合には、先に述べたとおり、全国の多くの方言が共通語化を中心に大きく変容しつつある中で、白峰方言もまた例外でないことがわかりました。ただ、同時に、最近調査を進めている石川県内数か所の方言に比べて、白峰方言がむしろその特徴を比較的よく残していることもわかりました。このことは、白峰の人たちが、自分たちの方言の特徴を強く意識し、村内での生活のことばとしての白峰方言に愛着を感じ始めていることと無関係ではないと思われます。近年、様々な形で方言が再評価されるようになりましたが、研究者が消えゆく伝統的方言の記録の重要性を強く意識しているのはまた違った意味で、地域社会の人たちが自分たちの生活のことばである方言に次第に目を向け始めていることは歓迎すべき傾向だと考えています。

白峰村では昨年から、20代・30代の若い人たちを中心に、北陸地方では唯一の方言イベントがスタートしました。ことば、特に音声のみの方言は一度消えたら復活することはまず無理ですが、このイベントを契機に、白峰村の人たちの生活にとって大切なことば、必要なことばは、これからもできるだけ長く受け継がれていってほしいものだと思います。

< 金沢大学教育学部 >

白山のヘビ

高木 雅紀

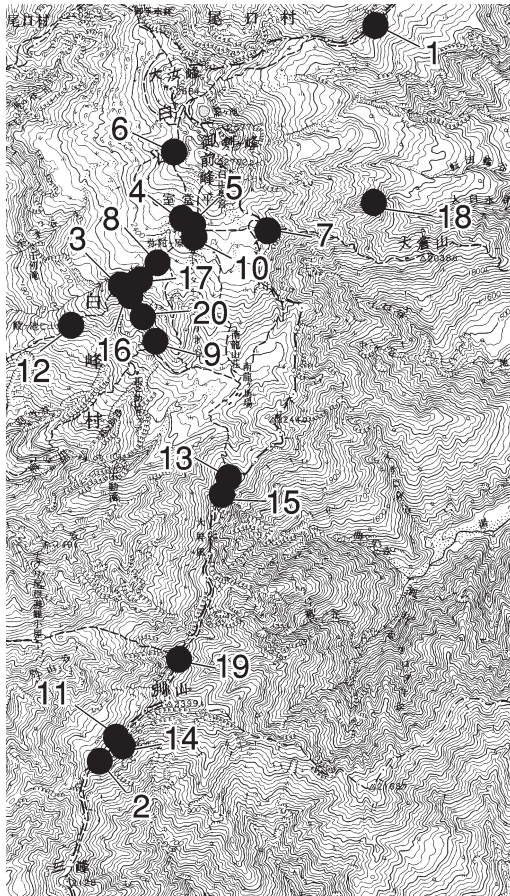


図1 白山高山帯(白峰村・尾口村・白川村)の両生・爬虫類
1・2アズマヒキガエル 3タゴガエル 4~6ジムグリ
7ヤマカガシ 8シロマダラ 9~17クロサンショウウオ
18~20ハコネサンショウウオ

白山には広大な自然がまだまだ残されていますが、爬虫類にとって白山で生活することは、厳しい自然環境との戦いの連続です。

平地では、一般的に多くのヘビが春(4月から6月の間)に交尾をし、夏(7月から8月)に産卵し、卵は秋(9月頃)にふ化します。冬眠からさめて十分な餌をとり、おだやかな気候の中で交尾、産卵を行い、卵も十分な気温の中で順調に発生をし、ふ化した幼蛇は十分に餌をとり冬眠にはいるといった生活を送ることができます。

しかし、白山で生活する蛇達にとっては、遅い雪解けがやってくると交尾から産卵を急いで行い、平地よりも温度の低い白山地域では卵の発生が遅いため、また、駆け足で秋が訪れるためにふ化した幼蛇はすぐに冬眠に入る準備をしなければなりません。このような厳しい自然環境のもと、白山地域には2科8種のヘビが生息しています。このうち、4種のヘビたちの生活を少しだけ、のぞいてみましょう。

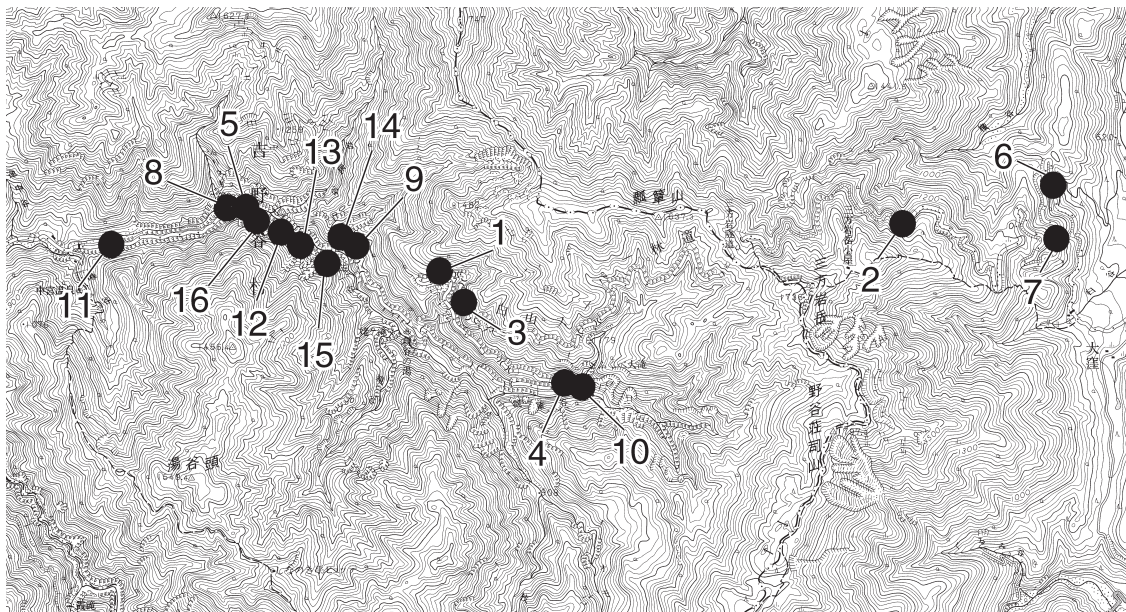


図2 白山スーパー林道周辺(吉野谷村・白川村)の爬虫類
1~4ジムグリ 5・6シマヘビ 7マムシ 8~11アオダイショウ 12・13ヤマカガシ 14カナヘビ 15・16トカゲ

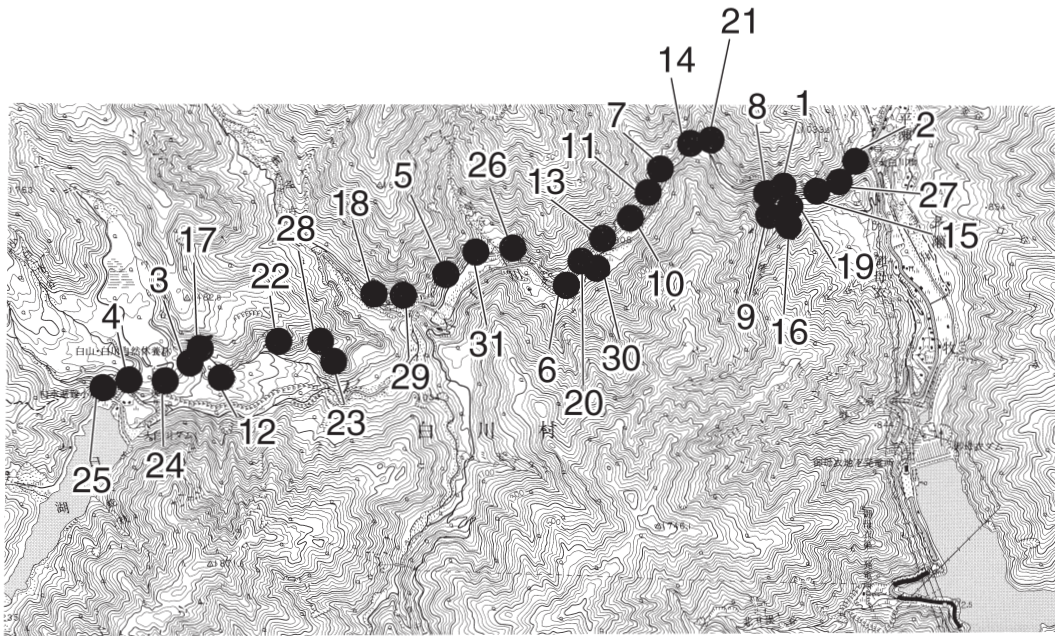


図3 大白川地区(白川村)の爬虫類
 1～5 ジムグリ 6～12アオダイショウ 13～19ヤマカガシ 20・21マムシ 22～24シマヘビ 25・26タカチホヘビ
 27カナヘビ 28～31ニホントカゲ

1. ジムグリ(ヘビ科)

よく「地に潜る」ことから「ジムグリ」の名が付いたヘビで、モグラ・ネズミなどの穴に潜り込んでこれらを食べます。幼蛇は、大変美しい赤色をしており全身に黒班が見られますが、成蛇になると黒班は目立たなくなり体色も茶色っぽくなります。また、腹側の鱗には市松模様のような黒い斑紋があります。まれにこれらの黒班のない非常に美しいアカジムグリ(ジムグリとは別種という見解もあります。)と呼ばれる個体が見られ、白山公園線(岐阜県側)の標高650m付近で轢死体で発見されています(図3)。



ジムグリの子成蛇
 白山スーパー林道にて 1999.9.12



アカジムグリの轢死体
 白山公園線(標高650m) 1997.10.6



飼育個体が産卵した卵がふ化 1999.9.25

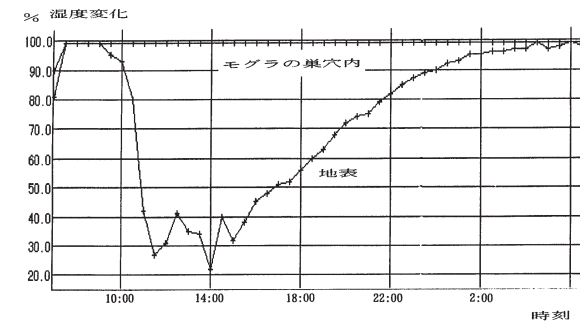
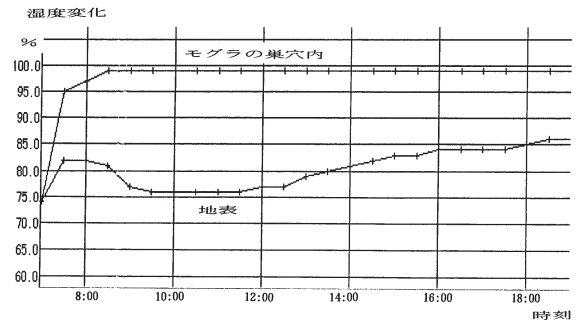
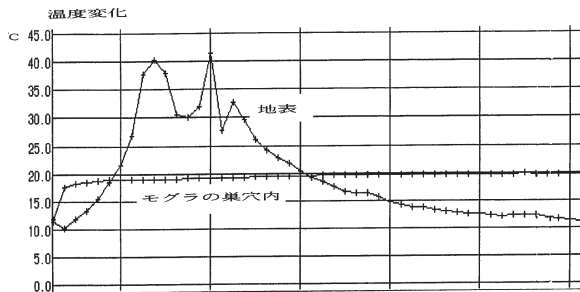
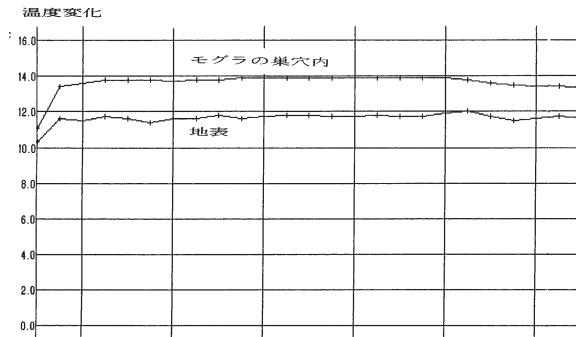


表1 モグラの巣穴内と地表の温度・湿度変化
室堂平（標高2,400m） 1997.8.1
巣穴内の測定は、地表から20cmの深さでおこなった。

表2 モグラの巣穴内と地表の温度・湿度変化
大白川登山口付近（標高2,400m） 1997.8.1
巣穴内の測定は、地表から20cmの深さでおこなった。

モグラ・ネズミの穴に住み、それらを餌とする、ちゃっかりもののヘビですが、このモグラ・ネズミの穴は彼らに食住（衣は、ヘビにとっては必要ありませんが・・・）をもたらしてくれるだけではありません。表1、2は、それぞれ高山帯・ブナ帯において、地表と地表から20cmの深さのモグラまたはネズミの穴の中の温度・湿度を測定したものです。地表に比べて、穴の中は温度・湿度とも安定しており、急激な天候の変化にも影響を受けないことがわかります。モグラ・ネズミの穴の中は、ジムグリにとって快適なゆりかごのような環境なのです。

飼育個体では、夏季には餌を食べなくなることが多いこと、12月にみぞれが降る中、見つかることもあることから、低温には強いヘビであるといえます。餌食いの悪い飼育個体にジネズミ（食虫類トガリネズミ科）のにおいをつけたマウスを与えると、またたく間に飲み込んでしまいました。餌に対するより好み強いヘビのようです。

2. マムシ（クサリヘビ科）

毒蛇で名高いマムシですが、卵胎生で平地では5～6月に交尾をし、8～10月初旬に2～13匹の幼蛇を産みます。交尾後4年以上たった個体が産卵した記録があるため、いったん交尾をするとメスの体内で精子が保存され、条件のよいときに受精するといういわゆる受精の「着床遅延」がおこなわれていることが報告されています。このことは、成蛇の活動期間の短い白山地域でマムシが繁殖するのに都合のよい性質といえます。



マムシ 白山スーパー林道にて 1999.9.12

表3に示すのは、1～2歳と思われるマムシの計測の結果です。平地（揖斐郡大野町産）のものは、同地域で採集したマムシの計測値との比較から前年に生まれたものであると推測できるものです。河合村天生の標高1,000m付近で採集されたものは、生まれて間もないアカマムシタイプの幼蛇です。白山公園線（白川村 標高1,100m）で採取された個体は、尾の先が黄色い（マムシの幼蛇は尾の先が黄色く、これを使って獲物を誘い出すという説もある。）幼蛇でした。

この幼蛇がこの年に生まれたと考えると、親は前年より前に交尾し、春先に受精がおこり発生が始まったため、平地よりやや早く生まれ、訪れの早い冬に備えて餌をとり体力を蓄えることができます。しかし、マムシは変温動物であるため、平地より気温の低い標高1,100m付近では卵の発生のスピードが遅く、幼蛇が生まれる時期も平地より遅く、前年に生まれたものと考え、全長、しっぽの色から生まれてほとんど成長せずに冬眠に入らなければならなかったと考えられます。いずれにせよ、厳しい環境の中、生き抜いていることがうかがえます。

採集地	採集日	全長	備考
岐阜県白川村平瀬（白山公園線標高1,100m）	1997.7.20	220.3mm	
岐阜県河合村天生（天生峠 標高1,000m）	1999.8.20	223.2mm	轢死体 アカマムシタイプ
岐阜県揖斐郡大野町野（標高 40m）	1999.8.10	352.2mm	

表3 1～2歳のマムシの計測値

3. タカチホヘビ（ヘビ科）

タカチホヘビは主にミミズを餌としており、他のヘビと比較すると鱗が重ならず、鱗と鱗の間の皮膚が露出して乾燥に大変弱いといわれています。白山スーパー林道でも、側溝や路上で乾燥死したタカチホヘビが報告されています。乾燥に弱いだけでなく、高温にも弱いようで、平地で採集した個体でも30 以上になる夏場には室温での飼育は無理です。白山に近い白川村天生で採集したものは、30 の温度で1日以内に死亡してしまいました。非常におとなしいヘビで、まず噛むこともありません。白川村天生では、シロマダラの胃内から発見され、岐阜県揖斐郡藤橋村では、マムシの胃内から発見されています。また、白山スーパー林道（ふくべの大滝周辺）ではアリに追いかけるタカチホヘビを目撃しました。

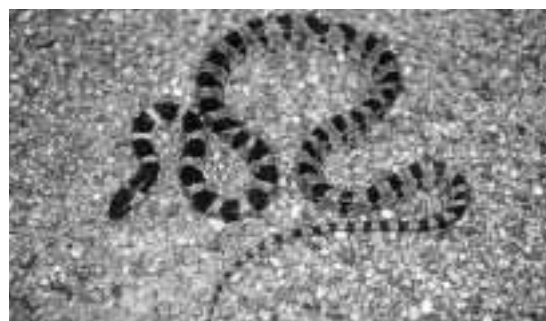


タカチホヘビ 白山スーパー林道にて 1999.9.20

白川村天生で採集したものは、30 の温度で1日以内に死亡してしまいました。非常におとなしいヘビで、まず噛むこともありません。白川村天生では、シロマダラの胃内から発見され、岐阜県揖斐郡藤橋村では、マムシの胃内から発見されています。また、白山スーパー林道（ふくべの大滝周辺）ではアリに追いかけるタカチホヘビを目撃しました。

4. シロマダラ（ヘビ科）

爬虫類を主な餌としているヘビで、飼育個体でもカナヘビ、トカゲをよく食べます。白川村天生の轢死体の胃内からタカチホヘビが出てきましたが、これは両者が主に夜に活動し、出会う確率が高いからではないかと考えられます。このヘビも低温に強く、岐阜県加茂郡白川町では、本種を12月20日に採集したことがあるほどです。



シロマダラ 白山スーパー林道にて 1999.9.20

最後に

ヘビに限らず両生類・爬虫類には、まだまだ解明されていないことが数多くあります。彼らが、この白山の自然環境の中でどのように適応して暮らしているのか非常に興味深いことで、少しでも明らかにしたいと思っています。

< 岐阜県立山県高等学校 >



1998年の白山の積雪と クロユリの開花

野上 達也

7月に入り登山シーズンとなると、白山自然保護センターには白山登山について、たくさんの問い合わせがあります。その質問の内容は様々で、登山道の状況や登山コースについてや山頂の天気、室堂や南竜山荘の宿泊施設や宿泊料、宿泊の予約制のことなど、白山登山を前にした問い合わせです。中でも多いのが「今年の高山植物の開花はどうでしょう?」「今見られる高山植物はなに?」「クロユリは咲いていますか?」というように高山植物についての質問です。白山は高山植物がきれいな山といわれているように、多くの登山者がその可憐な花を求めているからでしょう。

しかし、そういった質問に答えるのは、とても難しいのです。直前に調査で白山に行っていた場合などは、ある程度詳しくお答えすることもできるのですが、センターの職員が必ずしもすべての登山道におけるその日の高山植物の開花状況を把握できるわけではないのです。また、同じ高山植物でも、ある場所では、まだつぼみの状況だけけれども、またある場所では花が終わっているということはよくあることです。そうすると、「例年なら、もう開花しているころだと思います。」「場所によって違いますが、高山植物の見頃は例年なら7月下旬から8月上旬でしょう。」というような、ややあいまいな回答しかできないことも多いのです。

ところが、昨年、1998年夏の白山の高山植物の開花は、「この例年ならば、」に全く当てはまらない、とても異常な夏だったのです。その状況について、特に石川県の郷土の花であるクロユリの開花について調べた結果を紹介したいと思います。

1998年の白峰村の積雪

白山の山麓、白峰村には気象庁の気象観測所（標高480m）があって、冬季は毎日、どれくらい雪が降って、どれくらい積もっているかを記録しています。そのうち、どれくらい積もっているか、つまり積雪深の日変化を1993年から1998年の、それぞれ1月から4月のものをグラフにしてみたのが図1です。

これを見ると、1998年が、それ以外の年と比べて2週間以上も早く、3月5日には積雪0cmになっていることがわかります。その後、わずかな積雪はあるものの、すぐとけてしまい、最後の積雪が記録されたのは、3月22日でした。これは1993年から1998年の間では最も早い記録でした。

また、1998年で最も積雪があったのは140cmで1993年の130cmに次ぐ少ない記録でした。この1993年の130cmが1993年から1998年では最も積雪の深さが少なかったのですが、この年は2月下旬から3月上旬にかけて降雪があったため、1998年よりも遅くまで積雪が記録されています。

1998年は例年、大雪になる2月にあまり雪が降らなかったため、雪解けが早まったのだと考えられます。また、この1998年2月は平年よりも平均気温が高かったため、雪解けがよりすすんだ可能性もあります。

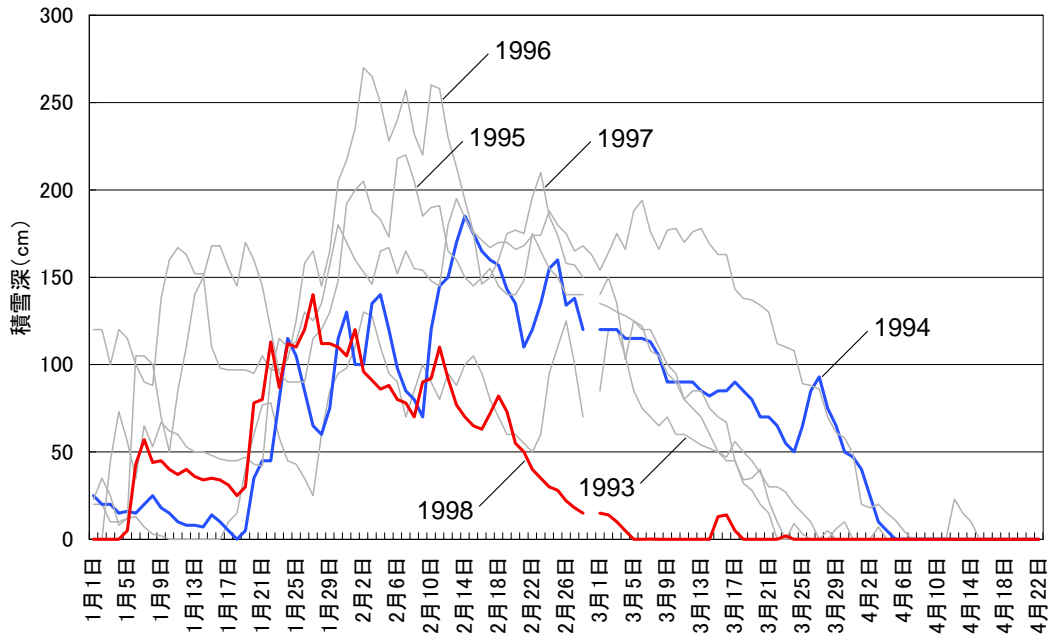


図1 白山麓白峰村における積雪深の変化



写真1 チブリ尾根より白山 (1998.5.23)



写真2 弥陀ヶ原より白山山頂 (1998.5.31)
弥陀ヶ原には雪はない

白山山頂の積雪

さて、白山の山麓、白峰村では雪解けが早かったことは気象庁の観測記録からわかったのですが、白山の山頂部の雪解けはどうだったのでしょうか？

写真1は、1998年5月23日のものです。市ノ瀬から別山へ登るチブリ尾根の標高約1,300mのところから白山山頂を写したものです。山頂部には、ほとんど雪が残っていません。実際白山に登ってみると、弥陀ヶ原あたり（標高2,300mぐらい）は7月上旬でも、まだ雪が残っていることが多いのですが、5月下旬だというのに雪は全く見られませんでした（写真2）。まるで夏山のようなようです。

白山自然保護センターでは白山の室堂近くで温度の観測を行っています。その結果の一部については以前の「はくさん」で紹介しています（「はくさん」第25巻第1号白山室堂平の気温と地温の通年変化 - 意外と暖かい雪の下 - ）。雪の下では雪が断熱材の役目をするために、外の気温が - 10 以下になる厳しい真冬でも、地表温度は、

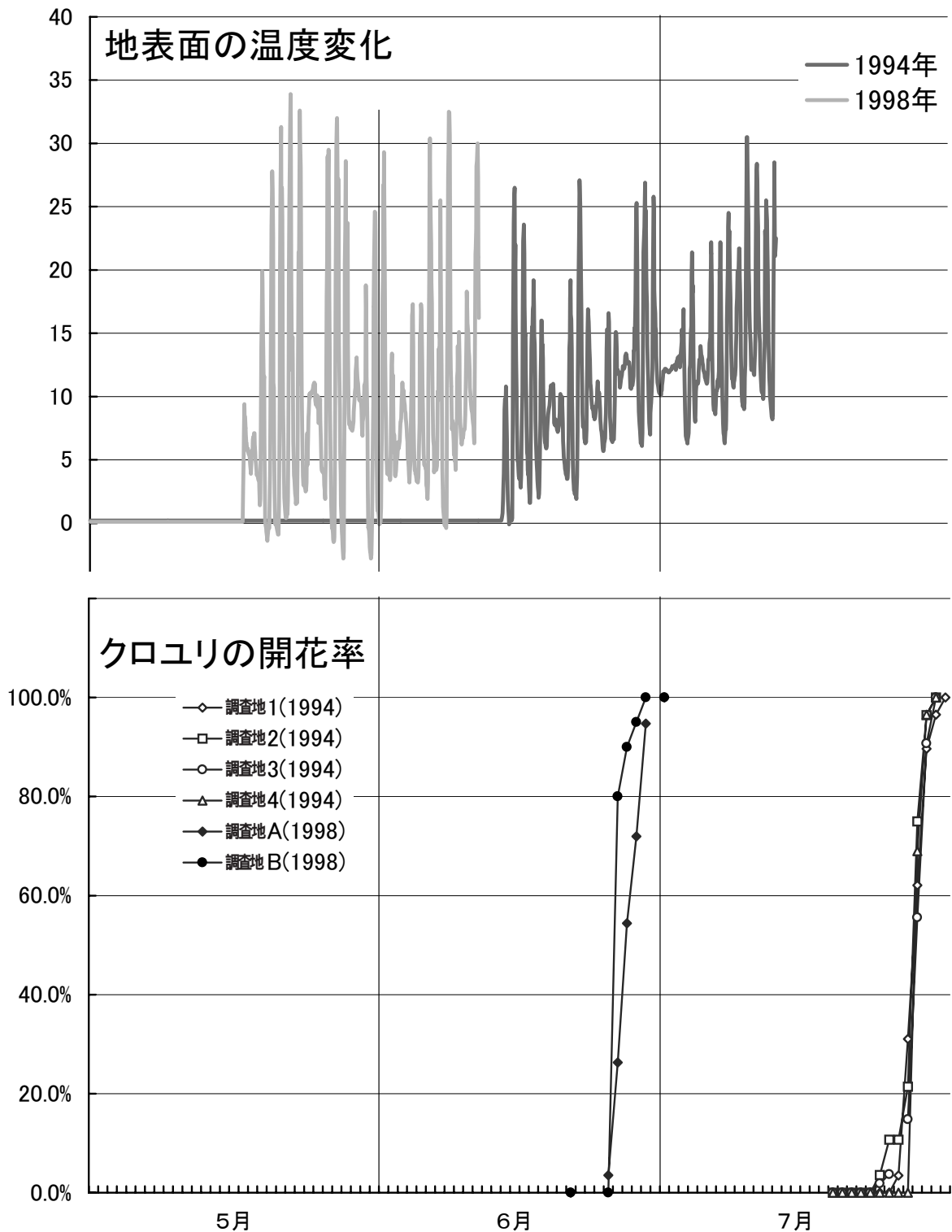
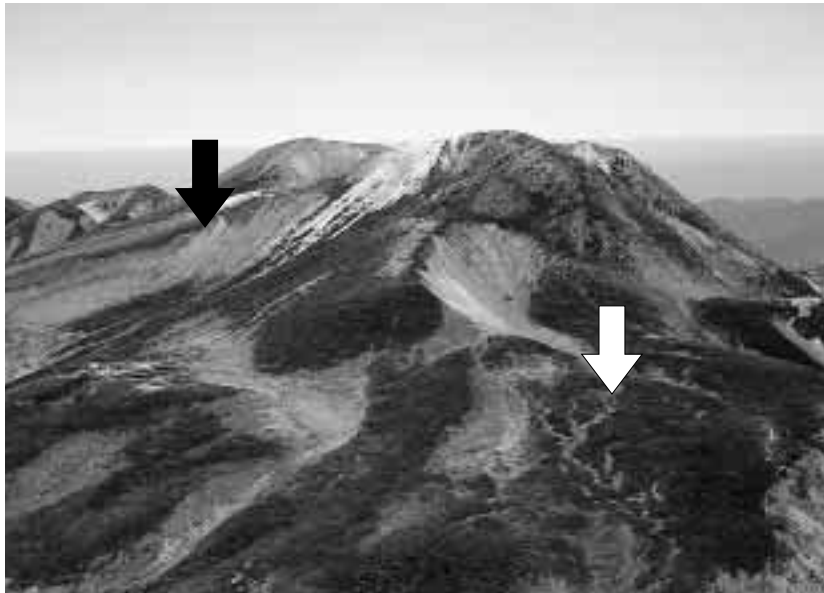


図2 1994年及び1998年の室堂平における地表面温度の変化とクロユリの開花率

ほぼ0 前後に保たれていることがわかってきました。そして、そのほぼ0 前後に保たれている状況は雪解けまで続くのです。図には1994年と1998年のデータを示しています。1994年6月14日、1998年5月17日に、それまでほぼ0 であった地表温度が急激に上昇を開始したことがわかります。それまでほぼ0 に温度変化を抑制していた積雪がなくなったためであると考えられます。ただし、この日が必ずしも、地表面に積雪がなくなった月日と完全に一致するものではありません。

1994年と1998年を比較すると、1998年は1994年より28日、約1か月早く温度変化があらわていることから白山山頂でも約1か月、雪解けが早かったと思われる。



地表温度の測定地(↓)と
クロユリの開花状況調査地(⇩)

クロユリの開花

さて、1994年に、当時金沢大学の学生だった八島武志氏が白山でクロユリの開花状況の調査を行っていました。その結果、集団内ではほとんど違いがなく、開花時期に差がないことをつきとめていました。

1998年の約1か月早い雪解けがクロユリの開花パターンに何らかの影響があるのではないかと考え、八島氏が調査した場所と同じ場所でクロユリの開花パターンについて調査を行いました。ある一定の範囲の中にあるつぼみをもつクロユリすべてをマーキングしておいて、いつ開花したかを記録しました。そして集団内で、どれくらいの割合で開花したかを示したのが図2です。

これを見ると、ある一定の範囲の中にあるクロユリの開花は、ほとんど同じ時期で、ほぼ1週間にすべての個体が開花していることがわかります。集団内ではほとんど同時に開花していて、開花時期に差がないという開花パターンについては1998年も1994年と変化はありませんでした。

しかし、1998年は1994年より約1か月早くクロユリが開花しました。地表面温度の観測地点と開花日の観察地点は同じ地点ではありません。しかし、開花日の観察地点も地表面温度の観測地点と同様に消雪が1998年は1994年と比較して約1か月程度早まった可能性は高いと思われます。雪解けが約1か月早かったため、芽を出して成長を開始した時期も同様に約1か月早まった結果、開花も約1か月早まったのではないのでしょうか。

厳密な記録はありませんが、他の高山植物もクロユリと同様に、開花が約1か月早かったようです。例年高山植物の見頃は7月下旬から8月上旬ぐらいなのですが、1998年は7月1日の白山の夏山開きの頃がちょうど見頃だったようです。



1998年はクロユリ以外の高山植物も開花が早かった
(室堂平 1998.6.21)

年によって残雪に違いがあって、その違いが高山植物の開花に影響することがわかっていただけだと思います。ちなみに今年、1999年は昨年とは違って高山植物の見頃は例年通りだったようです。

<白山自然保護センター>

殊才 実

9月に入っても、まだアカウシアブやイヨシロオビアブが展示館に入ってきます。昨年はオニヤンマがよく展示館に入ってきましたが、今年はいってきませんでした。展示館上空をイワツバメやアキアカネの群れが飛んでいます。展示館周辺では青紫色のツククサや淡紅色のミソソバや紅紫色のサワアザミなどの花が咲いています。

白山山頂部の紅葉は昨年同様あまり美しくありませんでしたが、10月下旬の展示館周辺の紅葉は昨年よりも美しく、写真撮影をしている多くの人達がいきました。

7月21日

展示館上空を夫婦仲良く飛んでいるイヌワシの姿が見られました。

8月

昨年の8月は雨の日が続きましたが、今年は雨も少なく、白山スーパー林道の利用者は増加したようです。

9月7日

館内を夫婦仲良く舞っているツマジロウラジャノメの姿は、まるでダンスを踊っているようにみえました。



なぜか展示館の玄関にあらわれたサワガニ
(1999.9.21)

9月20日

展示館勝手口付近をシロマダラ(蛇)が散歩している姿を見ました。

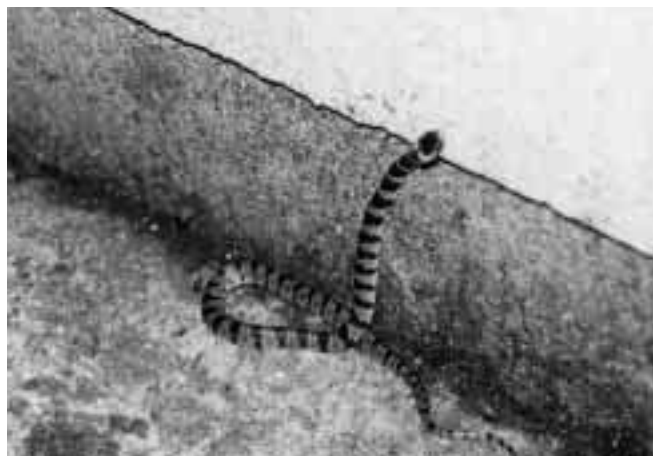
9月21日

展示館正面玄関をサワガニがゆっくりと歩いていました。

9月24日

展示館勝手口内で、9月20日に見たものより小さいシロマダラが見られました。

今年は平成7年以来のブナの実が豊作とみられていましたが(その後の天候のせいだと思われませんが)「並作」の年になったようです。



展示館で見られたシロマダラ
(1999.9.24)

市ノ瀬ステーション

中村真一郎

7月26日

夏休みの季節となった。高山植物もちょうど見頃な時季と重なり、市ノ瀬が多くの人々で最も賑わう季節だ。交通規制も始まり駐車場はいっぱいになる。登山者が中心だが、キャンプ、釣り、ドライブ、温泉など人によって目的はいろいろだ。私たちに様々な形で楽しませてくれる白山の魅力的な自然。楽しませてくれるというより、私たち人間が本能として自然を求めている気がしてならない。YES!! Back to the nature!!

8月10日

暑い!。標高830mの市ノ瀬の最高気温は35度! (今年の最高気温)。金沢などはもっと暑いのだろうか。ちなみにこの日、標高2500mの室堂の最高気温は23.6度 (やはり今年の最高気温)。11.4度もの差があった。白山登山の魅力はたくさんあるが、この気温差も数時間、汗を流して歩いた者だけが体感できる楽しみの一つであり、高山にいることを実感させられる。真冬の白山、-20度の世界では何を感じるのだろうか。

9月22日

市ノ瀬周辺でもトチノキ、オニグルミ、クリ、ミズナラなどもたわわに実を付けている。キノコはどうだろうか。つい食べることを考えてしまう。植物やキノコたちは子孫を残すために様々な形で移動をする。そのひとつ市ノ瀬では、ヤナギ科の植物の種子が、風に乗って綿毛のように飛ぶ現象が起こる。周辺にはドロノキが多く、その種子が秋晴れの空の下、雪のように舞うのだ。その光景は美しくも寂しい秋の訪れを感じさせてくれる。



チブリ尾根ブナ林にて (10月20日)

センターの動き（7月26日～10月31日）

7.31—8.1	白山自然ガイド養成講座開催（尾口村一里野）	9.5	白山自然ガイド養成講座開催（尾口村一里野）
8.6—8、8.13—15、8.20—22、10.8—11	白山交通規制（白峰村市ノ瀬）	9.8	県政バス—輪島市（中宮展示館）
8.13	野々市町教育委員会研修（中宮展示館）	10.3	白山の自然講座（金沢市社教センター）
8.24	大阪市扇町高校（人文科）研修（中宮展示館）	10.17	秋のブナ林観察会（尾口村鴉ヶ谷）
		10.19	海外研修生視察—中国、韓国3名（本庁舎、中宮展示館）

編集後記

今年の白山は、春から夏は例年どおりの気候と思われましたが、9月から10月には暖かい日が続きました。高山帯の動・植物もきっと影響をうけているのではないかと思います。

今年からいよいよ33年ぶりの室堂センターの改築が始まりました。今年度は取り壊し工事をおこない、13年度中に完成の予定です。

一方、南竜ビジターセンターは平成10年度に新築され、本年度から供用が開始されました。これにともなって南竜ヶ馬場周辺の自然解説活動がスタートして好評でした。

平成10年10月豊後高田市（大分県）で全国方言弁論大会が開催され、白峰村の参加者による発表が好評だったと聞きましたが、その地域のことばである方言は大切な地域文化の一つと思われれます。加藤さんの方言の研究は、白山麓の地域文化を探る研究といえるもので、興味深いものです。

白山地域で以前にイヌワシ調査をした時、もっとも多かった食べ物はヘビ（アオダイショウ）でした。嫌われものですが、ヘビやカエルが存在がワシタカ類の生活をささえているのです。高木さんの調査から、両生、爬虫類がまだまだ白山地域で多く生息していることがうかがわれます。

今後とも、白山の自然と文化が多様性を保ち、また発展していけるような施策ができるよう努力していきたいと思えます。

（林）



目次

表紙 仙人窟	小川 弘司 ...1
変容する言語島・白峰村の方言	加藤 和夫 ...2
白山のヘビ	高木 雅紀 ...6
1998年の白山の積雪とクロユリの開花	野上 達也...10
施設だより（中宮展示館）.....	殊才 実...14
（市ノ瀬ステーション）.....	中村真一郎...15

はくさん 第27巻 第2号（通巻112号）

発行日 1999年11月1日（年4回発行）
編集発行 石川県白山自然保護センター
920-2326 石川県石川郡吉野谷村木滑又4
TEL07619-5-5321 FAX07619-5-5323
印刷所 株式会社 橋本確文堂

（本誌は再生紙を使用しています）